

和歌：文苑

著者	そまを，鬼碧星，しほう，梨雨，錨山人，藤輪，葦舟
雑誌名	龍南會雑誌
巻	8 1
ページ	8 1 - 8 4
発行年	1900-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2298/5002

和歌

旅十首

そまを

旅にしては家をれもへど家にあればまた旅を思ふわが身にもあるか
薩摩路の十日の旅を日にやけてゐるさとの母を驚かしけり
明日こそは家に歸れども夜にあやましくも旅のをまざるゝかな
旅にして草に寝ねしとつげやらば母いかばかりおどろきまさん
雁の音に露宿の夢のさむるときぞ故里人はこひまかりける
妻につげず母にもつげず奴となりてろまやに渡るますらをひとり
海の色山のすがたのかはり果て故國遠くなりけるかな
日ざかりは村のやしるにひるねして夕月の頃を歩るゝ旅かな
いもうとが書さし葉書のふんに曰く葡萄うれたりはや歸りませ
彌治喜多の話に似たる耻もあり旅なればこそ旅なればこそ

夕暮十首のうち

山寺の入相の鐘の聲の中にこもれる歌をたれかきくらん
夕ぐれに君と手をととり袖なめて磯つたひゆけば思ふこともなし
かははりは「夜」の使かいつも夕となればあらはれ来る

遠きく黄泉の國より亡き魂の歸りますといふこの夕まくれ
 落つる日のくしき光に彩りて佛畫に似たる夕ぐれ
 この夕聖涅槃に入りますとくしき花ふる御山のあたり
 夕顔の今開くよといもうどの我を呼びにくる夕まぐれかな
 花も木も野山も川も人も馬もひとつに消ゆる夕まぐれかな

鬼 碧 星

あたし野の露ときえに去人のため夜をこめてなけ野邊の鈴虫
 幼子をつれて墓前に香をたく年若き身の尼あはれなり

似非小生の詩五首

守りませと神のみ前に頸根つきてねぎまつらくも敷しまの道
 遠つあふみ天の中川雲さわぎ流れさかまく夕立のそら
 豊の海の浦の秋かせ吹きもあへず蘆の花ちる大磯小磯
 此の里はまた來んところ朝な夕なきいす鳴くなり花かげにして
 秋葉山の春のあらゝぎ根ごま來て鹽漬にする詩人湖村

し は う

日本新聞の桂湖村、奇僻あり。客到る毎に風佳なるつけ物を出し、自ら稱して秋葉山の春蘭を、鹽漬にせしものなりといふ。

紅葉會詠草

梨雨、錨山人、藤輪、葦舟、外一名

悲しさを慰めかねて岩に坐せば嘲りの聲うつ波にあり
静けきよ羊の聲も今はたえて廣き牧場に夜の幕落つ
今日もまた羊の群れをやしなひて草青きところわれ笛をふく
磯ちかき松の木蔭に夏帽と詩集とありて其ぬし看えず

○
みつ汐のよする渚にひとり立ちて思ふとまげき夕ぐれの空
山訪ひて新墓の前にわがたては夕日消えゆくみ寺のはとり
夕雲の落ちゆく空をながめつゝ菩提樹の蔭に少女祈りする
葦の間にさわぐ鷺鳥の聲はたえて夕日うるゝ小沼のはとり
この夏は必ずどこそ誓ひてし君はかへらず今日秋たちぬ
鈴の音に松原遠くわけゆきてうばらに匂ふ海の色かな
鉄のどとき六尺男草にいねて母夢みぬとつげこすやさし

○
笛ふきて小川の岸をさまよへば月かけきよく水ながれゆく
さら／＼と清水ながるゝ岩蔭に一輪ゑめり白百合の花

○
蜻蛉逐うて今かへるらし里の子が軍歌をうたふ聲のきこゆる
夕まぐれ消えゆく森の木蔭より父とよぶ聲のなつかまきかな

眞ぐるなる森のかなたへ星落ちて山河にひせぶ夜あらしの聲

ゆきくれて右にや取らむ左せん問ふ人もあらず猿田彦大神

漢詩

下球麻河

野々口湖海

千古將歌蜀道難側身西望路盤盤天窺巖壑依危嶂舟叩波濤下急灘棧雨驚猿當岸響

峽雲蒼樹照人寒辛酸我亦懼如此不怪愁邊衣帶寬

八代

郡

王陵處
郡有西征

身入南朝國心懸五百秋山河八代郡風雨九州舟商女猶紅淚征人欲白頭都將今古恨分付水雙流

富

岡

縹緲波濤浮萬松我遠望之如臥龍此物深宵喚風雨吹倒天南第幾峯

後塞上曲

我已度遼海辭家萬餘里故鄉豈不慕報國志猶在去年下馬關破浪浮樓船風雲一歲月尺素天邊傳慇懃書中語問我塞上苦那知身如鐵轉戰歷寒暑而今將歸去撤兵仍振旅一鞭驅鐵馬可以摧山河如何聖明世不復勞干戈君眼望長城我血灑胡沙遼東若鄉土